

# 僕のヒーローアカデミアからみる社会風刺と

## 社会問題について

—人は生まれながらに平等じゃないは真実か—

松崎 花香

本論文は、堀越耕平による漫画『僕のヒーローアカデミア』を題材に、現代日本社会が抱える不平等構造を社会学的視点から考察することを目的とした。作中に描かれる「個性」社会は、生まれ持った能力や家庭環境が人生の可能性を大きく左右する点において、現代社会における能力主義、親ガチャ、ルッキズムといった問題を象徴的に反映している。

本研究では、まず「個性」が遺伝によって決定されるという設定に着目し、轟焦凍、爆豪勝己、緑谷出久、死柄木弔、渡我被身子といった主要キャラクターの家庭環境や生育歴を比較分析した。その結果、ヒーローとヴィランの分岐点には、個人の努力以前に家庭環境や社会的支援の有無が大きく影響していることが明らかとなった。特に主人公・緑谷出久の成功は努力主義的に描かれる一方で、特別な支援者から「選ばれた存在」であるという前提を内包しており、努力だけでは乗り越えられない不平等構造の存在を示唆していた。

次に、異形型「個性」を持つ障子目蔵とスピナーの対比を通じて、外見による差別、すなわちルッキズムの社会風刺性を検討した。両者は同じ異形者でありながら、周囲との関係性の違いによって包摂と排除という異なる結末に至っており、外見差別が個人の人生を大きく左右する構造が描かれていることを明らかにした。

さらに、大学生を対象に実施したアンケート調査から、多くの若者がルッキズムや親ガチャを身近な問題として認識し、外見や家庭環境が自己評価や人生観に影響を与えている実態が確認された。

以上より、『僕のヒーローアカデミア』は「人は生まれながらに平等ではない」という現実を描きつつも、他者との関係性や社会的支援によって人は変わり得るという可能性を提示する作品であると結論づけた。